

ウイリアム・ケアリの伝道に対する貢献

塩 谷 悟

キリスト教伝道の歴史を全体的包括的に捉えたラトゥレット (K.S. Latourette) が、「前進の三世紀」(Three Centuries of Advance)⁽¹⁾ として一五〇〇年から一八〇〇年までの伝道の主な担い手は、十八世紀を除けば、ローマカトリック教会であった。プロテスタントの側にも、十七世紀に、ウェルツ (J. von Welz) やエリオット (J. Elliot) などによって、ヨーロッパ外の異教徒に福音を伝える努力がなされたが、それは稀少例に属し、十七世紀末までのキリスト教の海外伝道は、殆どローマカトリック教会が独占したといっても過言ではない。

プロテスタント教会が、ヨーロッパ外の異教徒に対する無関心から目覚めて、海外伝道に参加するようになったのは十八世紀になってからである。それは、敬虔主義運動の中から起ったいわゆる「デンマーク・ハレレ伝道」(Danish-Halle Mission) として知られるものと、「デンマーク・ハレレ伝道」と深い関係を持ったモラヴィア派 (Moravians) の活動によって顕著に示された。前者の印度での活動は、プロテスタント教会の世界的発展の濫觴となつたし、後者のグリーンランド・アフリカ・北米・ジャマイカなどにおける献身的な活動は、十八世紀のプロテスタント伝道史を飾るものであった。

確かに、この両者の伝道が、ヨーロッパの全プロテスタント教会に海外伝道に対する少なからぬ関心を喚起したこ

とは否定し得ないとしても、それが具体的な形となって現われるには相当の年月を必要とした。殊に、英国は、十七世紀には、前記のエリオットや「キリスト教知識普及協会」(SPCK)の指導者ブレイ(T. Bray)を生んだにも拘らず、十八世紀には、啓蒙的合理主義に風靡され、ウエズレーとG・ホイットフィールドによって導かれた「福音主義的信仰復興運動」(Evangelical Revival)の中から、国外の異教徒に対する伝道が現われる世紀後半の半ば過ぎまで、それが海外伝道の上になすところは殆どなかったと言つてよい。本稿で取り挙げるウィリアム・ケアリ(William Carey, 1761-1834)はこのような舞台上に登場する。

ケアリは、伝道史家によつて「近代伝道の父」(the father of modern missions)と呼ばれているが、⁽²⁾そう言われるからには、彼の伝道についての考え方や計画において時代を画するようなものがあり、単に英国のみならず、プロテスタント教会全体に対して大きな貢献をなすところがあったと見做さなければならぬ。この点の考察が本稿の目指すところであり、それは、彼の英国時代と印度時代の両方において明らかにされるべきものである。

一

ケアリのライフワークは、二つの異なった時代、すなわち、彼が実際に宣教師として活躍した印度時代と、いわばそれへの準備としての英国時代とに別けられる。

ウォーカー(F.D. Walker)は、英国時代を「彼が伝道活動に対する当時の無関心と反対に殆ど独力で立ち向つてそれを克服し、よく練つた計画を考え出して驚くべき『問いかけ』(Enquiry)を出版、そして遂に、臆病で躊躇する人

々に世界伝道のための協会(Society)をつくらずにいられないようにした時代⁽⁹⁾として特徴づけている。この言葉は、ケアリの伝道に対する貢献を考える上で不可欠な『問いかけ』と伝道協会に言及している点で興味深い。ここで『問いかけ』と言われているものの内容については次節で触れるが、まずケアリがそれを書くに至るまでの大凡の道程を顧みておきたい。

ケアリは、英国内陸部のノーサンプトンシャーの小村ポーラーズプリー(Paularspury)で五人兄弟の長に生まれた(一七六一、八、一七)が、家庭の貧しさのため正式の教育も僅かしか受けずに、十四歳でハックルトン(Hackleton)の靴屋へ徒弟奉公に出される。その頃までに、子供の頃から知的追求心旺盛であった彼は、家にあった本や村で借用できた書物すべてを読み、特に科学・歴史・旅行に関するものを好み、校友が「コロンブス」と倂名したほど熱心に『コロンブス伝』を読んだ⁽⁴⁾という。そして、外国の情報を専ら伝えた新聞 Northampton Mercury を読むことによつて、他国や他国の住民に対する関心を持つようになり、また十二歳でラテン語を学び始めたが、このような彼の知識欲は、成長するにつれて益々増大し、靴屋の仕事の合間に、寸暇を惜しんで読書と語学の習得に励み、特に語学の点では、ギリシャ語・フランス語・オランダ語・イタリア語を独学で学んだほどその才に長けていた。

こうしたことは、彼が後年に自らを謙遜して「こつこつと努力する者」(Gladder)⁽⁵⁾と言ったことを納得させるし、性格的にも、少年の頃から「着手したことは何事にやらずやり遂げたし、様々の困難が彼の心を挫くことは決してなかったと思われる⁽⁶⁾」と言われるように、強い意志力と忍耐力の持ち主であったことを窺わしめる。

右に述べたようなケアリの旺盛な知識欲と強靱な性格は、これ以後に彼がなす大きな働きの欠かせない要素には違いないが、それに加えて、もう一つ彼の信仰的な歩みにも注目しておかなければならない。

ケアリの父は英国国教会の信徒で、ケアリ自身も最初はそうであったが、同じ靴屋の同僚（非国教徒）に感化されて、ハックルトンの非国教徒の礼拝に出席するようになった（一七七九）。しかし、そこで交わった非国教徒たちは、公認の教会とは全く繋がりがなく、何となく曖昧な性格であったため、靈的な光と導きを求めていたケアリは、やがてアメリカのエドワーズ（J. Edwards）の影響を受けた「特定バプティスト」（Particular Baptist）の牧師たち（J. Ryland, A. Fuller, J. Sutcliff など）の仲間に加わるようになる。

これより四〇年以上も前の一七三八年頃から、ウェスレー兄弟やG・ホイットフィールドの指導のもとに、リバイバルが英国中に波及し、著しく墮落していた国民の道德的・宗敎的生活を浄化し、信じられないほどの変革をもたらしていたが、このメソジスト運動は、ケアリと彼の周辺の人々に直接的感化を及ぼさなかったとされる。このことは、彼自身が若い頃のことを詳述したものにおいて、ウェスレーとその仲間には二回しか言及していないことによつて、また、ノーサンプトンシャーが古くからのバプティスト派の拠点であり、バプティスト派は厳格なカルヴァン主義者、メソジスト派は熱烈なアルミニウス主義者というように、截然と分けられて対立していたということによつても首肯される。

このように、ケアリはバプティスト派の人々と接触するようになったが、強いカルヴァン主義者の考え方に今一つ納得できないものを感じて、独力で聖書の研究を進めるうちに、新約聖書のバプテスマに関する箇所を読んで心を動かされ、ライランドの子息から受洗（一七八三）、オルニー（Olney）のバプティスト教会に入会したが、招かれてムールトン（Moulton）の牧師に就任する（一七八七）。

これより以前の二七八五年に、ケアリはムールトンに移り、二人の子供を抱えた生活（一七八一年に結婚）を支え

るために、靴屋と学校を開いていたので、これらが続けながらの牧師就任であったが、このムールトン時代（一七八五—八九）は彼にとって重要な意味を持つ。というのは、この間に宣教師への召命を聞いたからである。

このきっかけになったものが、『クック大佐の最後の航海』(The Last Voyage of Captain Cook)である。単なる冒険物語に過ぎないように思われるこの本も、ケアリにとっては、人間の必要を啓示するものであり、そこに描かれている入れ墨をした未開人も、神の愛について知るのを必要としている神の被造物である、「これらの南洋の島の人々は福音を必要としている！」⁽⁸⁾という海外伝道に対する最初の関心を目覚めさせるものであった。これを契機に、彼はギェスリー(Guthrie)の『地理入門書』(Geographical Grammar)やJ・エドワーズの『デビッド・ブレナードの生活と日記』(The Life and Diary of David Brainerd) また、初代教会や中世の伝道活動に関するもの、「デンマーク・ハーレ伝道」、J・エリオット、モラヴィア派について書かれたものなど、入手可能な、外の世界に関する書物をむさぼり読んだ。それだけでなく、彼の開いた学校の教室の壁に貼った世界地図に、すべての国の住民・宗教などについて学んだことを克明に記入しながら、世界の人々が福音を必要としているという思いに益々捉われていったのである。

そのような時に、ケアリは、彼の友人で以前は厳格なカルヴァン主義者であったフラリーが書いたパンフレット(Gospel Worthy of All Acceptation, 1784)に触れる。このパンフレットは、伝道のことを直接に扱ったものではないが、救いはすべての人々に及ぶのではなく、少数の選ばれた人々に限定されるという過激なカルヴァン主義者の説—ケアリやフラリーが交わったノーサンプトンシャー・バプティストの間に普及—に反対し、自由な恵みの真理を扱ったものであったとされる。⁽⁹⁾ 予てより厳格なカルヴァン主義に疑問を感じ、J・エドワーズの書物から大きな影響を受け、

「彼が説いたものに近い修正カルヴァン主義 (modified Calvinism) を支持するようになった」⁽¹⁰⁾ ケアリは、これを読んで痛く共鳴し、フラーの考えを伝道活動に移し換えて次のように結論した。「もし福音を信じている者がすべての人々の義務であるなら、……すべての国民に福音を伝えるように努めることは、福音を委ねられている者の義務である」⁽¹¹⁾と。そしてその時、ケアリの耳にキリストの「伝道命令」(マタ 28・16—20、マル 16・15—16) が聞こえ、「ここに私がおります。私を遣わして下さい」⁽¹²⁾と心の中で叫んでいたのである。これが、ケアリの宣教師への道を決定的にするものであった。

さて、神から与えられたこの召しを実現するために、ケアリはまず同国人に海外伝道の必要を訴え、理解して貰わなければならなかった。ということは、当時の英国の教会には、それに対する無関心と冷淡の風潮が支配的であったことを意味する。バプティスト教会に限って言えば、海外伝道の必要を自覚する人は稀れで、むしろ、それに対する否定的な考えの人が大部分であったことは次の事実が証明している。一七八六年、ノーサンプトンで開催の牧師会席で、ケアリが「キリストの伝道命令は今日でも実行しなければならぬのではないだろうか」という議題を提出した時、ライランド牧師は即座にこう叫んだ。「若い方、まあ座りたまえ。神が異教徒を回心させたいと思われる時は、君たちの助けや私の力など借りずにそうなさるだろう」⁽¹³⁾と。

このライランドの言葉に代表される考え方は、異教徒の回心は神自身の業であり、従って、それを促進するために人間のなし得ることは何もないし、またその必要もない、という当時の過激なカルヴィニズムのそれを示すものであったと言える。このような考え方がある限り、そして、ケアリの属した「特定バプティスト」がカルヴァンの予定説を奉じた限りにおいて、彼らの中に海外伝道の必要を認める人が殆どなかったという消息は容易に察せられる。

しかし、ケアリの訴えを阻むこうした状況も、初志貫徹をその特性とする彼を意気阻喪させるものではなく、却って彼の情熱を煽り、自分の得た情報やヴィジョンを、あらゆる機会を利用して、他の人々（同僚牧師には入念に）に伝える努力へと向かわせた。それだけでなく、さらに広範囲の人々に伝え、理解を得るために本を書く決心をした。これが嘗て書かれた最も説得力のある伝道についての訴えとなった『問いかけ』、正確に言えば、『異教徒の回心のためにキリスト教徒が手段を用いる義務についての問いかけ』（An Enquiry into the Obligation of Christians to Use Means for the Conversion of the Heathens, 1792）であった。

二

ケアリが『問いかけ』を書くに至った直接の動機は、前述の一七八六年の牧師会で明らかになった全世界に福音を伝えることに對する否定的状況であったが、その動機には、彼の聖書研究によって得た「キリストの命令は十分には実現されていない¹⁴」という確信も与っていたと思われる。では、このようにして書かれるに至った『問いかけ』はどのような内容のものであり、どのような伝道に對する貢献をなすものであったのか。

『問いかけ』は五章からなる僅か八七頁の小著であるが、ここでは、キリストの命令に基づき、彼の同僚牧師を説得する際に出会った異議に答えながら、福音を全人類に伝えるための諸問題が論じられている。「主によって弟子たちに与えられた命令は、なおわれわれが遵守する義務があるのではないかどうかの問いかけ」（第一章）から始め、使徒時代の伝道から、散発的に行なわれた十七、八世紀のプロテスタント伝道に至る「異教徒回心のための過去の事

業の概観」(第二章)、そして、彼の性格的特徴を示すこつこつと集めた情報に基づき、国あるいは島の名前、それらの長さや幅、それらの住民の数及び彼らの宗教という五本の柱で纏められた「世界の現況についての調査」(第三章)、さらに、異教徒回心に伴なう五つの困難、(1)彼らのわれわれからの距離、(2)彼らの未開・粗野な生活様式、(3)彼らによる殺害の危険、(4)生活必需品獲得の困難、(5)彼らの言葉のわかりにくさを認めた上で、「異教徒回心のためになされることの実行可能性」が述べられ、第五章では、キリスト教徒が具体的にとり得る処置として、(1)熱心な祈り、(2)世界が通商に開かれたことよって与えられる機会の精神的な利用、(3)宣教師を派遣する伝道協会の設立―教会が分裂した状態にあるために、差し当っては、各教派によって伝道協会がつくられなければならないが、それらは相互に誠心誠意の連絡を持つべきである―を提示した後、「まさに、キリストの御国を拡大する海外伝道の働きは、全力を尽すだけの価値がある」という言葉で本書を結んでいる。

ここでは、内容の全体に関してこれ以上立ち入る紙幅を持たないが、ウォーカーの言葉を借りて単純化して言えば、『問いかげ』は「キリスト教徒の責務、世界の必要、与えられている機会、伝道協会設立のための実際の提案についての理路整然とした陳述⁽¹⁶⁾」ということになる。この中には、気負い立った感情的訴えも、神学的論議もなく、印象的な事実の列挙によつて裏付けられた問題についての簡単な説明があるに過ぎないが、一八八七年に『ウィリアム・ケアリ伝』を出版したスマイス(G. Smith)は、『問いかげ』は「英語で書かれた最初のそして今でも最も秀れた伝道論文⁽¹⁷⁾」と評し、ウォーカーも「われわれの知る限り、西暦紀元の全世紀を通じて、あの独学の田舎者と同じ程度に、人間の必要と伝道の機会についての細心且つ組織的な調査をした者は誰もいない。そして今日でさえ、われわれは彼の根気のよい努力と情熱の所産を驚きをもって読む⁽¹⁸⁾」と述べてこの小著を評価している。

しかし、こうした贅辞からは『問いかけ』の卓越性は理解し得ても、それがどのような伝道的意義を持つものであるかまではわからない。一体、『問いかけ』には、当時存在したような伝道に対する考え方を突き破り、伝道界を動かすような何かがあったのであろうか。

簡単に言ってしまうと、それは、二つの点で伝道に対して貢献するところがあつたのではないかと思われる。その一つは、ケアリがこれの第一章において、当時まだ支配的であつたプロテスタント正統主義神学の伝道についての考え方に反対し、伝道を世界的視野で捉え、沈滞しているプロテスタント伝道に活力を与えようとしていることである。正統主義神学は、「伝道命令」は最初の使徒たちにも妥当するもので、彼らが当時知られた世界の果てまで福音を伝えたことにより成就されたと主張したが、ケアリはこれを認めない。彼は「オタヘイト (Othaité) の住民にキリストを説くことはパウロの義務ではなかつた。何故なら、そのような場所は当時まだ発見されなかつたし、パウロは彼らのところへ行く手段を持たなかつたから」と述べ、使徒たちの知らない処に福音を伝えられるべき人々が存在していたこと、従つて、「伝道命令」は使徒たちをもつて完結してはいないとし、今日も効力があるもの、継続的妥当性を持つものであることを示そうとしたのである。ケアリのこの見解からすると、使徒職は完結しているので、後代の教会は宣教師を地の果てまで派遣する権威も責任も有してはいないとした正統主義神学の立場も否定され、キリスト教徒は、キリストの命令に忠実に、世界伝道の業に励まなければならないということになる。

確かに、正統主義神学も *cuius regio, eius religio* (彼の領地内には彼自身の宗教を) ということで、ヨーロッパの旗が掲げられた地域の住民への福音の伝道を認め、それを奨励さえしたが、ケアリはすべてが神の被造物であること及びすべての人々に対する神の要求を認める上から、最も遠い島々への伝道さえ考えたのであつた。ということは、

マーグル (H.-J. Margull) の「ケアリ」としては、世界は常に全世界であり、ヨーロッパの旗が掲げられた地域だけではなかった⁽²⁰⁾ という言葉や、『問いかけ』に出てくる国々の中には、その時までヨーロッパ人に閉ざされていたものがあるという指摘⁽²¹⁾ からして、ケアリは真に全世界への伝道を志向していたと見做すことができる。この点では、彼は全世界のことを神学的観点から真面目に考えてラブレドルやニコバル諸島のような最も遠方の地域へ宣教師を派遣した最初の人物であるチンツェンドルフ (N. L. Zinsendorf) に負うところがあつたのかも知れない。しかし、それだけではない。彼の読書愛好による世界に対する関心の拡大と深化が、聖書のよく知られた言葉の広い解釈⁽²²⁾ と繋がり、世界は全世界として早くから理解されていたことが与っていたと思われる。

『問いかけ』のもう一つの貢献と考えられるものは、伝道活動を行なう義務を、罪人の失なわれた状態あるいは彼らに対する憐れみの中ではなく、主の命令に従うことの中に基礎づけた点である。これについては、「惨めな異教徒に対する憐れみが、モラヴィア派の中に強かったとすれば、それはケアリと共に殆ど完全に忘れられた」と言うマールグルの言葉によってその一端は窺われるし、また、本書の中でケアリの「義務」(obligation)、「服従」(obedience)、「われわれの義務でもある」(it is incumbent upon us) という言葉の屢々の使用によつても裏書きされる。神から伝道への召命を受け、しかも「伝道命令」は成就されていないとみたケアリ自身にとつて、その命令に服従して伝道活動に従事するのは、キリスト教徒に委ねられた義務であるとしたのは当然であつたと言わなければならない。そして、彼がこのように考える背景には、すでに引用した『問いかけ』の末尾の言葉から明らかのように、伝道活動によつて神の国の拡大がもたらされるとする彼の信仰があり、従つて、彼の場合には、神のために何かをする義務ということに強調点が置かれ (後で触れる彼の有名な説教が如実にこのことを示す)、それを越えて神学的な問題に関心

があったのではなかった。

以上に述べたところからわかるように、ケアリは、キリストの「伝道命令」はまだ完成されていないという理解に立ち、その実現のために、全世界的な規模での伝道の必要を、『問いかけ』を通して、単にバプティスト教会のみならず全プロテスタント教会に訴え、海外伝道についての当時の誤った考え方の変革を迫ろうとしたのである。カーン(H.J. Kane)が「『問いかけ』は確かにキリスト教史における境界標であり、その後の教会史に対する影響においては、ルターの『九十五か条の提題』と並ぶ地位に値する」と述べているのは、右述のような貢献を評価したものである。そして、この小著は、前記のフラーやライランド及びサトクリフの称賛を博し、「バプティスト伝道協会」の創立に大きな役割を持ち、これが広く読まれたという証拠はないが、バプティスト教会の外でも注目され、メソジスト伝道の創始者コーク(T. Coke)や、シエラ・レオネで英国聖公会従軍牧師として活躍したホーン(M. Horne)などに大きな影響を与えたのである。殊に、ホーンに対しては、『問いかけ』が刺戟となって、それと同様に高く評価された『英国諸教会のプロテスタント牧師に宛てた伝道に関する書簡』(Letters on Missions addressed to the Protestant Ministers of the British Churches)を書かしたほどであった。⁽²⁵⁾

ところで、『問いかけ』はケアリ自身にとっては目的のための手段にしか過ぎず、彼の直接の目的は、宣教師を派遣するための伝道協会をつくり、自らも宣教師として伝道に従事することであった。

この伝道協会をつくるというのも、すでに述べたケアリを取巻く周囲の状況から推して、簡単にはいきそうになかったが、彼が本の執筆と相俟って、同僚牧師への海外伝道の必要を執拗に訴え続けて事態を徐々に好転させ、一七九一年の牧師会で伝道協会設立の決議を促すまでに至った。しかし、この時は時期尚早とする者が多く、不成功に終る。

が、翌一七九二年五月三十日のノッチンガム (Nottingham) で開かれたバプティスト派牧師会で、その日の説教者に選ばれたケアリが、イザヤ書五四章二、三節を主題とする説教の中で、「神から大きいことを期待せよ。神のために大きいことを試みよ。」(Expect great things from God. Attempt great things for God.)と語って聴衆を感動させたことが、牧師たちの間で再度伝道協会設立の件を論議させた。がしかし、彼らは、英国の限られた地域の特定バプティスト教会の代表者で、英国全プロテスタント教会のそれではなかったし、しかも会員の多くは農民で経済的に貧しく、世界伝道という任務は手に余るという上から、ケアリの提案は再度見送られそうになった。それにも拘らず、その後のケアリの必死の訴えにより、一七九二年十月二日、十四名の同志を以って遂に「特定バプティスト異教徒福音宣布協会」(The Particular Baptist Society for Propagating the Gospel among the Heathen)——やがて「バプティスト伝道協会」(Baptist Missionary Society)と呼称(以下BMSと略す)——が創立されたのである。

右述のことが明示するように、この伝道協会は、世界中の異教徒に福音を伝えるというケアリの伝道的熱意の所産であったが、これの設立にはどのような意義が認められるであろうか。

もちろん、キリスト教の使信を全人類に伝えるという考えは、新約聖書と同様に古く、チンツェンドルフやモラヴィア派はそれを大事にしたと言えるが、ケアリの時代までに英国やアメリカに組織された伝道協会は、その伝道を特定の領域に限定するもので、ラトゥレットによれば、英国聖公会の「海外福音宣布協会」(S.P.G., 1701)は英国領地だけを考えていたし、「キリスト教知識普及協会」(S.P.C.K., 1698)は、英国自治領の外へも危険を冒して行ったものの、それは特に英国領土のためにもくろまれたもので、伝道を世界的な広がりにおいて考えたものではなかったと見做されている。また、エリオットの活動を支援した「ニューイングランド福音宣布協会」(Society for the Propagation

of the Gospel in the New England, 1649) もその例外ではあり得なかつた。

こうした点から考えると、BMSは、英国及びアメリカプロテスタンチズムにおける、世界を視野に置いて計画された伝道機関の最初のものと言ふことができる。そして、その視野の世界性は、次節で述べるケアリの印度伝道の中にも現われているし、何よりも世界各地へ宣教師を派遣したBMSのその後の伝道の歴史によって証明される。

周知の如く、BMSの設立を発端とするヨーロッパにおける一八二〇年代までの伝道協会の簇生は、それまでの個人あるいは小さな団体による孤立的・断続的な伝道から、伝道協会という強力な信仰的母体を支えとする継続的で統一・組織的な伝道の開始、言い換えるなら、プロテスタント伝道の新時代の到来を意味する。そして、これ以後、プロテスタントの世界伝道が活発に展開されるようになった事実を鑑みるなら、BMSの設立がその起爆剤的役割を果たしたとみるのは間違いではなからう。ここに、「BMSの設立が、通常、近代のプロテスタント外国伝道事業の始まり」と呼ばれ、またBMS創設の一七九二年が、伝道の年史が前後にそこから数えられる「特別な年」(annus mirabilis)⁽²⁸⁾と言われる所以があると思われる。

三

漸く念願の伝道協会設立に成功したケアリは、実際の伝道活動に着手するに際して、妻の反対、財政問題、伝道地の決定など様々の困難に逢着したが、それらを一つずつ解決し、一七九三年六月十三日、妻と四人の子供に二人の仲間を同伴して印度へ向って出帆、同年十一月十一日にカルカッタに上陸する。これ以後一八三四年の彼の死まで、四

○年余りに及ぶ広範な活動が展開されるが、以下のところでは、その全体に言及するのは不可能また不必要であるし、主題と関わる必要最小限の事柄に触れるに留めざるを得ない。

ケアリ以前に印度で活躍したのは、スウェーデン人宣教師キールナンデル (N. Kiernander) やモラヴィア派兄弟団であったが、リヒター (J. Richter) によれば、彼らはいずれもその活動の痕跡を殆ど残しておらず、そのために「印度における近代の伝道活動は、ケアリがカルカタに上陸した日から始まる⁽²⁹⁾」とされる。

しかし、その当時の印度の状況は伝道に好都合ではなかった。それは、一六一二年以来印度に進出していた英国東印度会社が、宣教師に対して懐疑的であったし、福音の宣布によって起るかも知れない社会騒動がその支配権を脅かすという危惧から、宣教師の入国に反対していたからである。このために、運よくカルカタに入ったケアリ一行は、そこに定住できず、内陸部のバンデル (Bandel) デハルタ (Deharta) マルダ (Malda) と移動するうちに六年が経過するが、この間をケアリは無為に過したわけではない。ベンガル (Bengal) 州の主要言語であるベンガル語 (ヒンドゥ教徒とイスラム教徒によって話された) とヒンドスタニー語 (イスラム教徒の言語) の研究、またサンスクリットの研究、聖書のベンガル語訳、小さな学校開設、ヒンドゥ教徒及びイスラム教徒に対する説教などに努めたが、すでにこれらの中に、神のために大きいことをなす上で、「説教・教えること・聖書翻訳は、最初からケアリの三つの方法であった⁽³⁰⁾」と言われるものが認められる。しかし、総じて言えば、この期間の活動は手探り状態でのそれと言うべきであり、本格的な活動の開始は、ケアリの求めていた協力者、すなわち、ワード (W. Ward, 印刷業者) とマーシエマン (J. Marshman, 教師) が英国から到着し (一七九九)、デンマーク総督の好遇を得て、英国東印度会社管轄外のデンマーク領植民地セランプール (Serampore) に伝道活動の本拠地を設けた一八〇〇年からである。

これ以後の、ケアリを加えた三人のセランプルを中心とした活動は顕著なものであった(それ故に、彼らは「セランプルの三人組」Serampore Trio と呼ばれた)が、その第一に取り挙げられるべきものは、聖書の翻訳事業である。

ケアリたちは、福音の伝道に役立つために、聖書の翻訳・印刷・出版には特に力を注いだ。すなわち、聖書の翻訳を助け、その下訳を作る印度人の学者や語学教師を集めたこと、翻訳希望言語の活字がない場合には、活字造りの技術者を雇い入れ、立派な印刷所を設立して植字工・印刷工・折りたたみ工・製本工を採用するなど、あらゆる努力を惜しまなかった。ケアリが、その語学の才能を認められて、設立当初のフォートウイリアム大学(Fort William College)の招聘に応じ、ベンガル語とサンスクリット語を教えるようになった(一八〇一—三〇)のも、言語の研究を深めて聖書の翻訳に貢献できる、また、そこからの給料を翻訳・出版事業の経費に充当できると考えたからである。

かくして、セランプルでは、一八〇一年のベンガル語訳新約聖書の出版を最初として、一八三二年までに四十四か国語の聖書の完訳もしくは部分訳が出版されたのである。⁽³¹⁾ これらの中には、印度各地の主要言語だけでなく、中国語・ネパール語・ビルマ語・マレー語・ジャワ語などに翻訳された聖書が含まれているのが注目される。これは、ケアリがアジアの全住民に彼らの言葉で書かれた聖書を与えることを最も重要な仕事と見做した⁽³²⁾からであり、そのためには、カトリックの宣教師(Sebastian)と英国聖公会の従軍牧師マーティン(H. Martin)が、それぞれにペルシャ語訳新約聖書をセランプル印刷所から出版するのも意に介なさなかったほどである。

これらの多くの聖書翻訳のうち、ケアリ自らが行なったのは、ベンガル語・サンスクリット語・マラータ語・ヒン

ドゥ語訳聖書であったが、これらも含めて、セランポール印刷所から出版された聖書は、厳しい批判に曝された。例えば、スコットランドの宣教師ダフ(A. Duff)は一八三九年にこう述べている。「学識と才能、時間と労力、それに金銭を多く使ったにも拘らず、二十あるいは三十の印度諸言語訳聖書のうち、半世紀持ちこたえることを約束するか、あるいはその言語での標準訳となりそうなものは殆ど一つもない」と。

確かに、ケアリたちが出版した翻訳には、H・マーティンが出版したウルドゥ語訳新約聖書が、今日使用されているその基礎をなしている(34)という意味での有効性を持つものはなかったであろう。しかし、それは、彼らが最初から完全なものを目指さずに、修正の必要性を認めた上で、「何もなによりは不完全な翻訳でもあった方がよい」という考えのもとに、荒削りながら「幾分急いで」出版した当然の結果であった。言うなら、彼らは、聖書を多くの言葉に翻訳する熱心さの余り、誤りを犯す不安に慮すことなく勇氣ある決断をしたわけで、そこには「彼らの傍にそれをするものが誰もいそうになかった」という事情も与っていたであろう。リヒターがケアリたちの四十四か国語の聖書に対する諸々の批判を容認しながら、なお且つ、それらを「全くすばらしい、そして伝道史がある限り、唯一無二の達成であった」と述べているのは、彼らの開拓者の努力を評価したものと思われる。

しかしながら、このセランポールで出版された聖書が、実際に各地住民にどれ位配布され、どのような影響を及ぼしたかについては、手許の資料では明らかにすることができない。

「セランポールの三人組」の第二の大きな活動は、諸種の学校の設立である。これらには、寄宿学校(Boarding school)無月謝学校(Free school)、日曜学校のほかに、一八一八年に設立されたセランポール大学(Serampore College)があったが、ここで特に触れる必要があるのはセランポール大学である。

これは、最初は、将来の印度伝道を委ねるといふ上から、印度人キリスト教徒の中から彼ら自身の宣教師を養成する伝道神学校として始められたが、何事によらず大きいことを計画したケアリたちは、印度人青年、それもキリスト教各派の青年だけでなく、研究の目的ならヒンドゥ教徒やイスラム教徒も入学させ、彼らに進んだ教育を授けるようにし、聖書とキリスト教神学のほかに、サンスクリット語・アラビア語・ベンガル語・自然科学・古典文学を教授するといふように規模を拡大、一八二一年には、ケアリたちが大部分の費用を負担した新校舎が完成し、デンマーク国王の後援も得て、六年後には学位を授ける権限を有する大学となつたのである。

しかしながら、セランポール大学は、主に資金の不足、スタッフ及び教科内容などの問題のために旨く機能しなかつた⁽⁴⁰⁾、伝道的観点からも必ずしも成功したとは言えない。リヒターが「ケアリたちは、彼らが死んだ時には、この大学の教授たちが彼らの伝道活動全体の指揮をとるであらうと考えていた⁽⁴¹⁾」と述べているのは、ケアリたちのユートピア的幻想であつたとしても、「セランポール大学は、少なくとも十九世紀には、その創設者たちの目標に到達しなかつた⁽⁴²⁾」というポッツ(E. D. Potts)の指摘は、印度伝道を託し得る有能な印度人聖職者の養成も、恐らく期待通りになかなかつたことを含んでいるであらう。

ところで、聖書の翻訳・出版と学校は、印度伝道の上で重要な意味を持つものであつたが、そのためにセランポールの宣教師たちが直接に福音を説くことを疎かにしたというのではない。ケアリは、セランポールの町やその郊外で、また周辺の村々で福音を説いたし、英国から応援に派遣された新しい宣教師が加わつた一八〇五年からは、大規模な計画を立て、政治的な事情が許す限り、東部及び北部ベンガル、アッサム(Assam)オリッサ(Oriasa)のみならず、遠くボンベイ・ビルマ・ジャワなど、聖書をその言葉に翻訳した地域へ福音を宣べ伝えるために宣教師を派遣したの

である。⁽⁴³⁾各地での宣教師の福音の説き方は、恐らく区々であったであろうが、ケアリについてのみ簡単に触れると、彼は、最初のうちはキリスト教の長所を説くよりも、ヒンドゥ教やイスラム教の欠点を攻撃した。しかし、それをキリストの死と復活の物語に切り換え、聴衆の注意を保つのに成功してからは、キリストの死と復活が彼の説教のテーマになったと言われる。⁽⁴⁴⁾

しかし、セランポールのバプティストのこうした広範囲に互る福音の伝道にも拘らず、回心者は比較的少なく、印度だけについて言えば、一八〇〇年から一八二一年までの回心者は一四〇七名、うち印度人は約半分であり、しかも、その回心者は、性格的に劣った者、米信者 (Rice Christian)、また最も無知な階級の出身者、という他教派宣教師などからの批判を受けたが、セランポールの宣教師たちは、これらの批判をそのまま肯定せずに反論している⁽⁴⁵⁾ので、真偽のほどは簡単には断定できない。

がしかし、回心者の稀少は、ケアリが『問いかけ』で、宣教師は許し控え目であり、同情的であらねばならないと警告しているにも拘らず、その警告は宣教師 (ケアリ自身も含めて) によって屢々守られず、印度の風習を非難し、ヒンドゥ教やイスラム教の弱点をついたこと、またキリスト教への回心がもたらす印度人の家族・カーストあるいは村の社会的結合の破壊に対する不安などがその原因と考えられるであろう。さらに、それは「バプティストは、キリスト教に耳を傾けた人々がその教えを奉じるかどうかを決定するのは宣教師の領分ではない、と信じていた。彼らの義務は、教えを知らしめることであつた⁽⁴⁶⁾」というバプティスト全般についての指摘、つまり、彼らは実際上の回心よりも、福音を伝えて回心のための下準備に努め、結果については神に委ねるといふ伝道態度とも無関係ではないと思われる。その証拠に、神のために大きいことを行なうのを旨としたケアリたちは、すでに述べたように、聖書の翻訳

も福音の伝達も、印度だけに限定せずにはアジアの全住民を対象として考えたのであった。

かくして、彼らの直接的な福音の伝道は、印度社会に大きな影響を及ぼすまでには至らなかつたと言えよう。

ケアリたちの以上に挙げた三つの面での活動に限って言えば、充分な成果があつたとは必ずしも言い切れないが、そのために彼らの印度伝道が無意味であつたと速断するのは避けなければならぬ。というのは、その一つは、ケアリたちの華々しい活躍が、ベンガル総督に認められ、それまで伝道を拘束していた英国東印度会社特許状法(Charter Act)を修正せしめ、プロテスタントの印度における自由な伝道への道を開いたからである。すなわち、ケアリが上陸した時には、英国東印度会社の管轄地域内で宣教師が活動するのは許可されなかつたが、一八一三年の特許状法の更新においてそれが認められたことにより、英国からの「教会伝道協会」(CMS)、LMS、ウェスレー派メソジストの入国と、すでに始まっていた伝道事業の拡大を可能にし、さらに、一八三三年の特許状法の更新においては、如何なる宣教師も、印度で生活するのに東印度会社の許可を必要としないとされたため、それ以後、多くの国の宣教師が印度へ入り始め、伝道が活発化したからである。

ここに、ケアリのプロテスタントの印度伝道に対する貢献を認めなければならないが、右の伝道に好都合な二つの修正のために、ケアリが直接に動いたという確かな証拠はない。しかし、ラトゥレットの「彼が長い間印度において最も広く知られた英国宣教師であつたという事実が、……伝道のための法律制定の動機⁽⁴⁹⁾たらしめた」という言葉は、ケアリの存在が、キリスト教伝道に有利な道を切り開かせる上で、大きな力となつたことを肯定せしめるものである。

ケアリの印度伝道のもう一つの貢献は、ケアリたちの活動が、*The Periodical Accounts* (1794-) と *Monthly*

Circular Letters (1807〜) によってプロテスタント界、特に英国と米国にいち早く報じられ、それが刺戟となって多くの教派の中に伝道協会を生んだことである。スミスによると、LMSと「エディンバラ・グラスゴー伝道協会」(The Edinburgh and Glasgow Missionary Societies, 1796) 及びCMS (1793) は、「ケアリの初期の手紙の直接的結果であつた」⁽⁸⁸⁾と言われるが、むしろ、例えば、LMSは「オランダ伝道協会」(The Netherlands Missionary Society, 1797) と、世界各国へ宣教師を送って広範な活動を展開するようになる「アメリカ海外伝道局」(ABC FM, 1810) 創設の因をなし、ABC FMから「アメリカバプティスト連合」(The American Baptist Union, 1814) が生まれたという事実を考える時、ケアリの与えた影響は計り知れないものがあつたと言わなければならない。そしてまた、数十年に亘って、ケアリの手本に鼓舞された無数の人々が、彼の足跡に従い、母国を離れて外国に渡ることによって、キリストの「伝道命令」への招きに服するようになった⁽⁸⁹⁾という点も同時に併せて考えるなら、ケアリの印度での活躍は、十九世紀のプロテスタント教会の海外伝道隆盛―そこには宗教的信仰復興運動の影響が認められるにせよ―の大きな因をなしたことは否定できないであらう。

四

これまでの叙述でケアリの伝道に対する貢献は認められたが、彼にそれを可能ならしめたものは、伝道に対する熱意、それも、『問いかけ』に示された如く、キリストの命令に忠実に世界中に福音を伝えたいという熱意であつた。それが実際の行動に現われては、BMSの創設、有能な応援者との協力による神のために大事をなす印度での活動と

なつたのであつた。

ところで、疑いもなく、バプティスト派の宣教師であつたケアリは、セランポールでのコミュニオンサービスをバプティストに限定する⁽⁵²⁾というように、自己の教派を意識した点も認められるが、彼にはそれだけでは捉え切れない幅の広さがあつたのは確かである。これは、彼が気軽に多くの教派のキリスト教徒と交わり、またそれらの宣教師が印度へ来ることを歓迎しただけでなく、LMSが南アフリカへ伝道に入つたという報告を喜び、その開拓者ヴァンダーケンブ(J. T. Vanderkemp)に好意的な手紙を書いた⁽⁵³⁾という事実によつても示されるが、最も驚くべきことは、ケアリが、キリスト教徒の全教派の会議を一八一〇年頃にケーブタウンに召集する(しかもそれは十年毎にどこかで開催される)ようBMSに提案した⁽⁵⁴⁾ことである。これには、福音を全世界にもたらすために、宣教師、伝道の専門家、伝道協会の役員が出席し、彼らが直面している伝道上の諸問題を解決する筈になつてゐた。そして、ルーズ(R. Rouse)は、当時の各伝道地を含むプロテスタント界には、そのような会議の召集に好都合なしるしが見えていた実状を指摘しているが、⁽⁵⁵⁾ケアリのこの提案は、全教派の会議では一致が得られないという理由で、彼の友人フラーにより、「ケアリの楽しい夢」(Carey's pleasing dream)⁽⁵⁶⁾として拒否されたのであつた。

しかし現実には、一八五四年以降、ケアリが提案したように、大体十年毎に世界伝道のためのあらゆる教派の会議が開催され、そのうちの最も注目すべきものが、後に「国際宣教協議会」(IMC, 1921)を生みそして「世界教会運動」(Ecumenical Movement)の出発点となつた「エディンバラ世界宣教会議」(Edinburgh World Missionary Conference, 1910)であつた。このエディンバラ会議の際、それに貢献するような仕方⁽⁵⁷⁾でケアリの提案が想起された事実はないとしても、少なくとも、十年毎の全教派会議という考え方の起源はケアリにまで遡り得る⁽⁵⁸⁾し、エディンバラ会議の準備

委員会が取扱ったすべての問題は、ケアリがすでに取組んでいたと言われるので、もしも一八一〇年の会議が実現されていたとするなら、IMCのみならず、「信仰と職制」運動及び「世界教会協議会」(WCC, 1948)の出現を早めていたであろうと想像するのは空想的な過言をさへであろうか。その実現は、恐らく、プロテスタント教会の伝道とエキメニズムの歴史を変えていたであろうし、このような憶測が許されるなら、ケアリは、伝道活動のみならず、それと深く関わる「世界教会運動」にも大きな貢献をしたと言わなければならないであろう。

註

- (1) K. S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity*, Vol. III. London, 1939.
- (2) 原著者 R. H. Glover, *The Progress of World-Wide Missions*, Revised ed. N. Y. 1952, p. 59
- (3) F. D. Walker, *William Carey, Chicago*, 1925, cit., p. 7
- (4) *Ibid.*, p. 24
- (5) K. S. Latourette, *These Sought a Country*, N. Y. 1950, p. 21
- (6) F. D. Walker, *op. cit.*, p. 19
- (7) *Ibid.*, p. 35
- (8) *Ibid.*, p. 50
- (9) *Ibid.*, pp. 52-53
- (10) K. S. Latourette, *These Sought a Country*, cit., p. 22
- (11) F. D. Walker, *op. cit.*, p. 53
- (12) *Ibid.*,
- (13) *Ibid.*, cit., p. 54
- (14) E. A. Payne, *The Growth of the World Church*, London, 1955, cit., p. 45
- (15) William Carey, *Enquiry*, Hodder and Stoughton, London, 1891, cit., p. 87
- (16) F. D. Walker, *op. cit.*, p. 68
- (17) G. Smith, *The Life of William Carey*, London, 1887, p. 35
- (18) F. D. Walker, *op. cit.*, p. 68
- (19) W. Carey, *op. cit.*, p. 10
- (20) *World's Christian Federation, History's Lessons for Tomorrow's Mission*, Geneva, cit., p. 141

- (21) K. S. Latourette, *These Sought a Country*, p. 25
- (22) E. A. Payne, op. p. 45
- (23) World's Christian Federation, op. cit., p. 143
- (24) H. J. Kane, *A Concise History of the Christian Church, Michigan, 1978*, cit., p. 85
- (25) G. Smith, op. p. 295
- (26) K. S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity, Vol. V*, p. 69
- (27) *Ibid.*, p. 58
- (28) R. H. Glover, op. p. 59
- (29) J. Richter, *A History of Missions in India*, London, 1908, pp. 130-131
- (30) G. Smith, op. cit., p. 130
- (31) F. D. Walker, op. p. 232
- (32) J. Richter, op. p. 139
- (33) E. D. Potts, *British Baptist Missionaries in India, 1793-1897*, Cambridge, 1967, cit., p. 86
- (34) S. Neill, *A History of Christian Missions*, Penguin Books, 1964, p. 267
- (35) F. D. Walker, op. cit., p. 227
- (36) *Ibid.*
- (37) E. D. Potts, op. cit., p. 88
- (38) J. Richter, op. cit., p. 140
- (39) E. D. Potts, op. p. 130
- (40) *Ibid.*, pp. 131-133
- (41) J. Richter, op. cit., p. 142
- (42) E. D. Potts, op. cit., p. 134
- (43) J. Richter, op. p. 141
- (44) E. D. Potts, op. pp. 36-37
- (45) *Ibid.*, p. 36
- (46) *Ibid.*, pp. 44-45
- (47) W. Carey, op. pp. 75-76
- (48) E. D. Potts, op. cit., p. 47
- (49) K. S. Latourette, *These Sought a Country*, cit., p. 33
- (50) G. Smith, op. p. 290
- (51) K. S. Latourette, *These Sought a Country*, p. 38
- (52) *Ibid.*, p. 34
- (53) *Ibid.*
- (54) International Review of Missions, April, 1949, p. 181
- (55) *Ibid.*, pp. 187-192
- (56) *Ibid.*, p. 181
- (57) R. Rouse and S. Neill, *A History of the Ecumenical*

Movement, 1517-1948, Philadelphia, 1968, p. 355
(89) Ibid.

(90) International Review of Missions, April, 1949, p.
182